

一九七四年のマラリ暴動(*1)とその影響―ラグラグ会(*2)の発展

藤田公郎

元国際協力事業団総裁(一九九四・二〇〇〇)及び
元駐インドネシア日本国大使(一九九二・一九九四)

一、一九七四年一月、田中角栄総理大臣はアセアン五ヶ国をフィリッピン、タイ、シンガポール、マレーシア、インドネシアの順で訪問された。筆者は当時南東アジア第二課長の職にあり、同訪問を準備、企画し、主管課長として同行していた。最初の訪問地マニラでは、マルコス大統領による熱烈な歓迎を受け、会談自体は殆んどが首脳二人だけで行われ、更に大統領と首相のみでゴルフをしながらの会談が急遽セットされるなど、事前に事務的に準備されていた日程は大部分が無視されるか変更されたが、訪問自体は大成功に終わった。次の訪問地タイのバンコックでは情勢は極めて緊迫しており、多数の学生がホテルへの道筋をふさいでおり、町の各所で日本の経済『侵略』に対する抗議デモが行われていた。シンガポール、マレーシア両国では滞在時間も短く且週末にあたっていた事もあって、町の中で散発的に抗議集会が開かれ首相の人形が燃やされた由だったが我々の目に触れる事はなかった。

二、そして一行はクアラルンプール空港を離陸し最後の訪問地ジャカルタへと向かったのである。総理の訪問が発表される数ヶ月前から学生や青年団体による対日抗議行動、騒動の動きはあった。ジャカルタ駐在の日本大使館を学生団体の代表が訪問し日本人の行動、マナーを是正して貰いたいとの要求文を手交していた。然しながらインドネシア政府は首相一行のインドネシア訪問は静かな平和的雰意気の下に行われるであろう旨繰り返し保証していた。インドネシアが当時実質的にはなお軍の統治下であり、Kopkamtib(治安秩序回復作戦司令部)が首都の治安維持の全権を握っていた以上、日本側としてはその保証を信頼する以外なかったのである。

三、然しながら一月十四日夜一行がジャカルタの軍事空港であるハリム空港に到着した後、空港から首都中心部までの主要通路は全てデモ隊によって封鎖されてしまっており、一行はわき道をとって迎賓館までたどり着いた。その後のジャカルタ滞在中の三日間一行は大統領官邸に隣接する迎賓館から一步も外に出る事が出来ず、出発日の一七日朝もヘリコプターでハリム空港まで運ばれる始末だった。暴動はジャカルタにおける公式滞在日程の最初の日一月十五日が最も激しかった。当日は大統領官邸をめぐる市の中心部のみならずジャカルタ市街全体が動乱の中にあった。公式発表によるとこの混乱で、燃やされ乃至破壊された車両八〇〇台、逮捕者四七〇人、死者十一名だった由である。然し公式会談の行われていた迎賓館は極めて平穏であり、秩序ある雰意気の中で行われていた交渉の合間に筆者は壁の外に燃え上がる炎を瞥見するのみであった。然し現地からのテレビ中継で暴動の生々しい一部始終を見ていた日本国内では、政府関係者のみならず一般国民が危機感とショックを受けていたのである。東京の外務本省からはジャカルタに滞在中の首相随行団に対し、例えば大使館でのデモ隊によ

る日章旗の引き下ろし事件に対し強くインドネシア側に抗議するよう電話で訓令してきた。筆者からはその件については既にアダム・マリク外相が自ら大使館に来訪し遺憾の意を表したのみならず、スハルト大統領自身が会談中で総理に対して遺憾の意を伝えていた旨説明した。総理一行に随行してきた記者団は町に出て写真を取りまくり、暴動の実情を報道し、原因の分析を行う事に忙殺されていた。日本の報道はこれら記者の現地からの劇的描写に充ちた記事とインドネシア及び東南アジア専門家によるコメントで溢れていた。世界中のメディアもこの事件を極めてドラマチックに報道し、この原因は東南アジアにおける日本の経済的『オーバープレゼンス』にあると断じた。筆者とその上司であるアジア局長はこの訪問の目的が達成出来なかった事に対し進退伺を出す相談を密かに始めていた。田中総理は然しながら帰路の航空機内で我々の進退伺いを退け、その代わりに帰国後速やかにこの暴動の原因を分析し事態の改善策を考える様指示された。

四、東京に一行が帰国後、外務省はアジア全体における日本人の行動改善計画を策定する為、官、財、学各界を網羅した知識経験を総動員し、アジアにおける日本人の『行動規範』を策定した。この中には現地の言葉を学ぶ、現地の文化を知る、現地の人々の中に入る努力を強化する、現地人雇用者を日本人と同等に待遇する事等が含まれている。

五、その後数年の間に東南アジアの地政学的情景には大きな変化が見られた。田中総理のアセアン諸国訪問の翌年、一九七五年には北ベトナム、ベトコンの攻撃によりサイゴンが陥落し、ベトナムは統一された。世界中のメディアがサイゴン最後の数日の模様を極めて劇的に報道し、世界最強の軍事大国アメリカを打ち破ったベトナムを先頭とするインドシナの動向に今後の東南アジアの将来はかかっている旨を一致して指摘した。インドシナとの間に自然の境界の無いタイ国の将来は先ず『望みが無い』し、マレーシアがどうなるかが可能性半半だろう、おそらくインドネシアとフィリピンは海があるから何とかなるだろう、というのが東南アジアの将来に就いての大方の観方であった。これとともに世界のメディアに占めるアセアンの地政学的地位も相対的に低下した。かかる情勢に対応する為アセアンは成立以来始めてのサミット会合を一九七六、一九七七両年に相次いで開催し対策を協議したのである。

六、日本の次の総理となった福田たけ夫氏がアセアン訪問を行った一九七七年は正にこのような時期であった。同総理は訪問した五ヶ国の首都で何れも熱烈な歓迎を受け、マニラにおいて日本の対東南アジア基本政策を網羅的に述べた演説を行った。これが世に言う福田ドクトリンである。同総理は演説において、この地域には多くの変化が起こっているが、日本にとっての最大、最密の友人はアセアンであり、この地域における日本の政策目的はアセアンとインドシナとの平和共存を実現する事にあるとした。筆者はこの訪問に外務大臣秘書官という前回とは異なる資格で随行していた。今でもありありと覚えているのはジャカルタの独立宮殿(大統領官邸)での晩餐会の光景であ

る。晚餐を終えた後、恒例の民俗舞踊、歌曲が披露され、最後に白のロングドレスに身を包んだ日本の婦人のグループが舞台に現れ、インドネシア語でインドネシアの合唱曲を見事に唄ったのである。同席のインドネシア高官が筆者に耳打ちした所では、合唱の音楽的な素晴らしさはもとより、インドネシア語の正確さに感心したとの事だった。何れにせよ前回から僅か三年の後に直面した余りの異なった光景に筆者は感無量であった。

七. インドネシア歌曲といえば、ジャカルタにはインドネシア語でインドネシアの歌を唄う日本人のコーラスグループが四つあった。第一のものは音楽的水準が最も高い『B & B』即ち『the Beauty & the Beast』とこうグループでメンバーは殆んどが音楽学校の卒業生であった。次に婦人連のグループ、即ち日本で盛んな奥様コーラスが二グループあって日本とインドネシアの歌をともに唄っていた。最後の四番目がラグラグ会で、メンバー中には楽譜も読めない者が少なくなかったのでその音楽的水準はかなり怪しいものがあつたが、政治的乃至社会的使命感は最も強かった。このグループこそマラリ事件後に策定された行動規範を契機に生まれた組織なのである。ジャカルタに駐在する日本大使は自動的にメンバーとなり、全てのメンバーは入会順に番号を貰う。筆者の前任国広道彦大使は十番以内の番号であつたが、これは一九七四年に同大使が公使参事官としてジャカルタに駐在中にラグラグ会を創設した一人だからである。筆者が一九九二年に赴任した際は五百番を与えられた。多くの日本からの駐在者は数年後に帰国する為日本にもラグラグ会の支部を作り、帰国後もインドネシアの歌を唄い続けようとの声が大きくなり、現在は東京と大阪に支部が設けられている。東京支部には筆者も現在所属しているが、同支部では月一回の練習会と年一度の大ギヤラコンサートが開かれる慣わしで、その際は在京のインドネシア大使夫妻が招待され列席される慣習となっている。

八. マラリ暴動はインドネシア人の間では、国内政治に民主主義が欠けている事への不満を表明するデモであり、この大衆の不满の気持ち在上層部の権力闘争に利用されたと言う側面があると解されている。インドネシア外の学者がインドネシア政治について書いた書物や論文も同じような解釈をしている。一九九四年筆者が大使としてジャカルタに在勤していた際、同年一月マラリ事件二十周年記念という事でインドネシアのメディアがそれぞれ特集を組んだ。これを読むと、『日本の総理大臣の訪問時に』という時期についての言及を除いては日本という文字は何処にも出てこない。全ての記事が事件を全くインドネシアの内政問題として扱っている。然し未だその時期は新体制（*3）の頃であつたから、政治的考慮もあつて全ての事実が明らかにされた訳ではない。筆者としては将来いずれかの時期にユスフ・ワナンデイ博士、或いは戦略国際問題研究所、ジャカルタポスト紙所属のどなたかによってあらゆる考慮を排して客観的に本事件の事実関係が明らかにされる事を希望してやまない。

九. (補記)一九七四年一月十五日の暴動に就いての外国人学者の解釈は大体次ぎのような

ものであり、インドネシア人も大方はこれに賛成している。

スハルトは一九六八年に正式に大統領に就任し、一九七三年に再選された。然しその統治は不人気であり、特にアリ・ムルトポ、スジョノ・ワマルダニなどに代表される大統領補佐官は絶大な権力をもち、インドネシア政治に大きな影響力を行使していた為、インドネシア政治の腐敗の象徴となり、彼らに対する批判は激しいものがあつた。他方治安秩序回復司令官スミトロ陸軍大將はその人柄が豪放磊落な印象を与え、学生との対話集会を実施するなど大衆的人気があつたのみならず、軍内部でもスハルトを上回る人気を博しているといわれていた。そこで次回の大統領選挙ではスミトロがスハルトの有力な対抗馬となろうとの観方が徐々に強くなつていた。マラリ事件が当初は学生のデモに発したが、その後ならず者などが多く入り込み暴動と化した背景には、何らかの組織的な関与が疑われている。事件後喧嘩両成敗の形で、スミトロは治安秩序回復司令官を免ぜられ、大統領補佐官制度も廃止された。然しスミトロ大將が一年後には現役から退き政治の表舞台から全く姿を消したのに対し、ムルトポ、スジョノは名目上は別の役職に就きながらも実質的には依然として大統領側近としての権力を振るい続けた。このような点からマラリ事件によって勝利したのは補佐官グループであり、この背後にはスハルト自身がいて、マラリ事件は大統領をめぐる権力闘争のクライマックスであり、結局スハルト大統領の権力確立に終わったとの観方が多い。

* 1 一九七四年一月田中総理のアセアン諸国訪問時にジャカルタで発生した暴動。マリとは発生の日時を指す『一月十五日の悲劇』を意味するインドネシア語を略した語に由来する。

* 2 ラグラグとはドネシア語で歌を唄うの意味で、ラグラグ会は一九七四年に創立された日本人によるインドネシア語でインドネシアの歌を唄う会の名称。メンバー数は600余名に及び、東京、大阪にも支部を持ち、東京支部では毎週の練習会の他、年一回コンサートホールを借り切ってギャラコンサートを開き、在京インドネシア大使その他の招待客が参加する慣わし。

* 3 新秩序 (New Order) の時代とはスハルト大統領の統治していた時代一九六七年から一九九八年頃までをいう。

(本論文はインドネシア所在戦略国際問題研究所の創設者の一人ユスフ・ワナンデイ氏誕生七十歳記念論文集―二〇〇七年十一月刊行―所載の為英文で寄稿されたものを筆者が邦文に翻訳した文章である。なお注記*及び補記は本会報のため増補した)

* 編集者註

ラグラグ会の最初の会は、国広元大使が公使参事官として滞在中の一九七七年七月十三日(水)夕6時半から、ジャカルタ ジャパンクラブで行われました。

